

「柏崎」の周辺

中村 格

柏崎市の古刹飯海山香積寺は、建長年間、柏崎権之守勝長の開基とされているが、この勝長を能く「柏崎」の柏崎殿とみる説がある。

「白川風土記」（中村文庫）に勝長の旧館跡と伝える現在の寺地については「謡曲拾葉抄」にも「越後国柏崎は（中略）昔、柏崎殿といひし人知行し給ひし所なり。柏崎殿の系図未考。今其所に寺あり。号香積寺。」とあり、本書成立の十八世紀半ばごろには越後以外の土地でも知られていた様子が窺える。古刹のあまた伝存する柏崎で「今其所に寺あり」として、とくに香積寺を挙げたのは犬井貞恕がこの寺地を柏崎殿の館址とする在地の伝承を知っていたからにはかななるまい。

しかし、柏崎勝長なる人物の存在は中世史料に未だ確め得ず、その虚実をめぐってはこれまでにも論議的になってきた。とくに、江戸期に入って柏崎が日本海海運の要津として一層の発展を遂げ、宿場人・船問屋などを中心とする俳諧・連歌などの町人文化が盛に

なるにつれ「柏崎」立証への気運も昂まってくる。享保三年五月、町民有志が花若入寂の地と伝えられる信濃善光寺の庚申堂に勝長父子の遺品を求めたのもそうした試みの一つであった。

ところが、遺品は返らず、由緒書のみが届いた。これには父子の没年や花若母の善光寺参詣、遺品目録など記してあるが『柏崎編年史』（柏崎市刊）は、求めた遺品が一品も存在しなかったこと、由緒書自体の「文体・書風ともに種拙で、下僧が町民の（勝長父子に對する）讚仰に迎合したフシがある」などの点から、信憑性に乏しいものとみている。

しかし、この由緒書を全くのデッチ上げと決めつけてよいかどうか……。というのは、『編年史』は見落しだらしいが、花若とその老母に関してにはほぼ同様の記事が江戸初期の儒者・書家であった林道栄の「道栄雜記」にみられ、かつ、花若丸こと金運坊勝賢（由緒書では勝久）については吾妻鏡にその実在を

確認することができるからである。まず、「雜記」の該記事を引用しておこう。

弘長三年二月中旬、鎌倉最明寺禪堂より当山へ立念仏誦經堂二、為寺領深田郷寄附

念仏衆の内 花若丸

金運坊勝賢カウツバ

同年三月上旬、老母如来へ参詣

納物

一、グソク 一、甲（ヒラドシ）

一、立烏帽子 一、ヒタ、レ（アサギ地）

紋ハ丸ノ内ニタチ

花ナリ

一、タチ一腰（モツカウツバ）

右の納物元和元乙卯三月二十九日南之門

より出火、丑刻本堂炎上之時何れも焼失也。弘長三年、西明寺禪堂（北条時頼）による免田深田郷寄進の件は吾妻鏡によつて知ることができ。すなわち、同年三月十七日、時頼は信州深田郷内の水田十二町歩を善光寺不断経衆・不断念仏衆に糧料として人別五段を分ち宛てたが、その寄進状並びに規約が同書同日条に記録されている。日付に若干のズレはあるものの、「雜記」冒頭の一文がこれを指すものであることはまず間違いない。不断経衆・念仏衆（それぞれ十二名）とは昼夜十二剋を交替して誦經あるいは念仏する

を役とした僧侶で、その多くは寺僧・山僧あるいは伊豆山または鎌倉鶴岡八幡、極楽寺等から選出派遣されたらしい(善光寺史)。時頼はこれによって北条氏累代の亡魂を弔い、併せて来世の値遇を祈念したのである。件の金蓮坊勝賀が吾妻鏡では念仏衆ではなく経衆の部に名を連ねているのは、結番規定にも示されているように、それぞれの忌日には経衆もまた念衆三昧の勤行を義務づけられていたからであろうか。

それはともかく、吾妻鏡所収の時頼寄進状から、由緒書並びに「雑記」にみえる金蓮坊勝賀が、時頼によって善光寺如来堂に勤仕せしめられた不断経衆の一人であったこと、かつ、「雑記」に俗名を花若丸、さらに「カツヨシ」と振り仮名のあるところから、金蓮坊がまだ年若い俄道心であったことなどを想像し得るのである。

金蓮坊勝賀の出自については明らかでない。しかし、同じ経衆の敵蓮坊聖尊がこれより五年前の正嘉二年六月四日勝長寿院曼供職衆卅口の中に権少僧都とあることや、他にも検校俊然、権別当俊範等の名も列記されていること、また、結番規定によれば、人別五段の免田を平等に与えられ、事に当ってはすべからく衆議によるべきことなどを申し渡されているところをみると勝賀もまたこの三者と比

肩し得る身分であったと想像される。納物の窠、鑢の太刀、緋緘の甲、丸の内に橘の家紋などもその家柄の良さを語っているよう。

上層武門の若武者、善光寺への俄かなる遁世、その跡を追うかのごとき老母の参詣。納物の武具は俗世への未練を絶たせるための母心からか、それともわが子に異心なきを明かすための方便でもあったのか……。善光寺進出をめぐって北条氏内部にも血生臭い風の吹き荒れていた時代である。この一片の書きつけの裏には何か深い理由が秘められていたのかも知れない。

「雑記」に記すごとく善光寺は元和元年三月晦日の大火により一字残らず焼亡、あまたの寺宝・什器も悉く灰燼に帰した。道栄のこのメモが何によったか今は確めるすべもないが、焼失後もその目録がわざわざ記録されているところに、当時これらの納物がそのいわれとともに広く知られていたことを窺わせるものがある。

周知のように中世の善光寺には佐藤継信兄弟母尼公をはじめ、大磯の虎、千寿前など女人参詣譚が少なくない。あるいは能「柏崎」以前に、この納物をめぐる母子の物語り、老母の如来参詣譚が善光寺聖たちの唱導として広く語り伝えられていたのかも知れない。